Interview

旧姓で五輪に出場する ライフル射撃選手

源 洋子さん

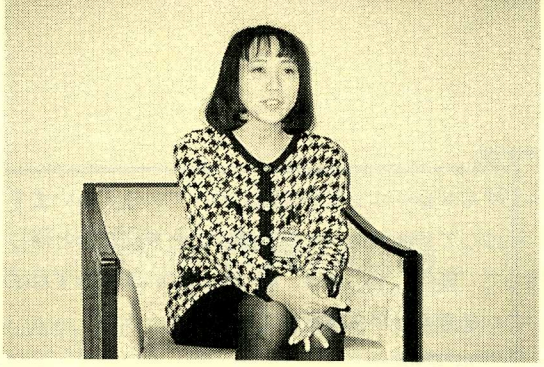
アトランタ五輪は７月19日に開幕します。ソウル、バルセロナに続き３度目の五輪出場を決め、メダル候補と期待されているのが、ライフル射撃の源洋子さん(28)です。前号の表紙の写真を覚えているでしょうか。射撃の標的をねらう一瞬の表情をとらえた『一点集中』というタイトルの写真の“モデル”が、実は源さんです。源さんは昨年３月18日、大学時代の同級生で、ライフル射撃の競技仲間である目良明裕（めらあきひろ）さんと結婚。目良さんは自衛隊体育学校に所属する男子のトップ選手です。戸籍の上では「目良洋子」さんになりましたが、ライフル射撃は「源洋子」の旧姓でとおしています。そのあたりの事情を含め、競技と結婚生活の両立、五輪や今後の抱負等について伺いました。

◇

ライフル射撃

現在、競技として行われている射撃には、ライフル、ピストル、クレーの３種類がある。ライフルとピストルは決められた距離に置かれた標的を狙うもので、狩猟から発展したクレー射撃は、クレー（粘土）を焼いた皿状の標的が放出されるのを散弾銃で撃ち落とすもの。

ライフル銃には数種類あり、五輪種目になっているのはエアライフル（直径4.5㎜ の鉛弾を撃発する銃）とスモールボアライフル（直径5.6㎜ の実弾を撃発する22口径の銃）である。女子の競技方法は、エアライフルは10m先の標的を立射で１時間15分以内に40発撃ち、その合計得点（ 400点満点）で順位を競う。スモールボアは50mの標的を伏射、立射、膝射の３姿勢で、２時間30分以内で20発ずつ計60発撃ち、総合得点（ 600点満点）を競う。



●源　洋子（みなもと　ようこ）さん

1967年７月18日生まれ。83年、大阪府私立箕面自由学園高等学校に入学と同時に射撃部に入部。86年４月、日本大学経済学部に入学し、在学中の88年にソウル五輪出場を果たす。90年４月、㈱日立情報システムズに入社。ＯＡ事業部に所属し仕事の傍ら、ライフル射撃部の一員として練習に励んでいる。主な戦績は、90年の北京アジア大会スモールボアライフルで金メダル。92年、バルセロナ五輪出場、94年広島アジア大会ではスモールボア団体で銅メダル獲得。 164㎝、54㎏。

三度目の五輪出場

―― アトランタ五輪出場、おめでとうございます。射撃といえば自衛隊や警察を連想してしまうのですが、源さんがライフル射撃を始めたきっかけは何ですか。

「高校にたまたま射撃部があったんです。当時、大阪で１校だけだったと思いますが、珍しいので入部してみました。競技人口が少ないせいもあって、すぐにまあまあの成績が出せるようになりました。法律で年齢制限があるので、そのころはエアライフルだけでした」

―― 大学３年でソウル五輪に出場されたんですね。

「そのころは上り調子の怖いもの知らずで、かなり自信はありました。でもそれまで国際試合の経験があまりなく、あっという間に終わってしまった感じです。（エアライフル17位）

スモールボアはソウルが終わってから始めました。エアライフルは立射だけですが、スモールボアは３つの姿勢で、ほとんど初心者と同じでしたね。最初はアザはできるし筋肉痛になりました。それにエアライフルは室内ですが、スモールボアの場合、的は屋外にありますので、風雨やかげろうなど外的な条件に左右されやすく慣れるまで大変でした」

―― 射撃はメンタルな部分が大きく影響するスポーツだと思いますが、何かそのためのトレーニングはしている

のですか。

「メンタルトレーニングを特別にやっている人もいますが、私はしていません。ただ、練習のときに試合と同じ気持ちで“集中”を心がけ、勝つためにいま何をすればいいのかを考えながら練習しています」

── 練習の内容は。

「ひたすら撃ちます。エアライフルとスモールボア３姿勢で４種類の練習をしなければならないのですが、全部１日にやるのではなく、１日３種類までにすることにしています。たとえばエアライフル 100発、スモールボアが２姿勢で 200発といったパターンですね」

── タマの値段は高いのではないですか。

「エアライフルが３円弱ですから 100発で 300円。スモールボアは30円弱、29円ぐらいだと思います。200 発で約6000円ですか。会社（日立情報システムズ）の射撃部に所属して練習しているので、費用は会社もちです」

同社にライフル射撃部ができたのは89年10月。武道にもあい通ずる倫理性を求められるスポーツということで導入が決まった。源さんはじめトップ選手はライフル射撃、一般社員は社内文化体育活動の一環としてビームライフル（光線銃）に取り組んでいるそうだ。実業団としては唯一の企業である。

ここで実物大の標的を見せていただいた。エアライフルは10m先にある直径３cmの黒い的をねらう。的の内部がさらに細かい同心円に分けられていて、最高得点の10点がもらえる中心部の直径は0.5mm（センチではない）である。一方、スモールボアの標的は直径11cm。いちばんポイントの高い中心部の直径は10.4mmである。しかし、この的は50m先に置かれるため、「撃っているときは、３cmのエアライフルの的のほうがずっと大きく見える」（源さん）のだそうだ。源さんの利き目は右で、視力は1.5 。射撃選手は視力が命と思われるが、意外にも目の悪い人はかなりいて、射撃用のメガネがあるそうだ。

結婚後も競技は「源」の旧姓で

── 同じライフル選手の目良さん（明裕氏＝自衛隊体育学校）と結婚されたのは去年でしたよね。

「ちょうど１年になります。大学の射撃部の同級生だったんです。ナショナルチームでずっと一緒に競技を続けていて、ソウルもバルセロナも一緒に行っていますから、もう長いですね」

── 結婚されて、生活が大分、変わったのではありませんか。

「いいえ、お互いに何も変わりません。変わったことといえば、結婚前は二人ともそれぞれ一人暮らしをしていたのですが、一緒に住むようになって家賃が半分で済むようになったことぐらいでしょうか。（笑）結婚の前も後も、自分たちがやりたいことをずっとやっているので、何も変わっていませんね」

── 結婚しても何も変わらない、それが理想なのかもしれませんね。

「そう感じたから結婚したのかな。（笑）普通だったら結婚はオリンピックの後にとか考えそうですが、私だけじゃなく、二人とも結婚しても何も変わらないと思ったので、いつ結婚しても良かったんです」

── 結婚への周りの人の反応はどうでしたか。競技を辞めるのではないかと心配されたりしたことは。

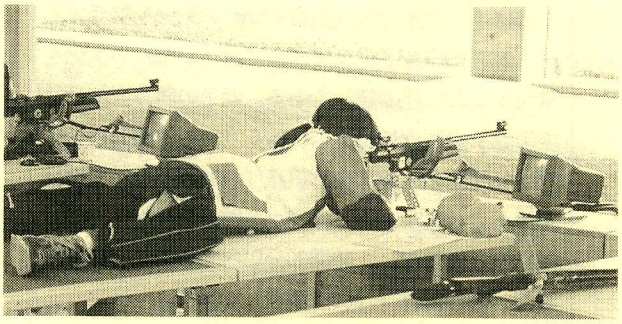
「すんなりと受け入れてくれました。結婚して私が競技を辞めてしまうなんて、だれも思っていないでしょうね。私にとって“射撃は生活の全て”という訳ではなくて、普通の人と同じなんですよ。競技も仕事も結婚も、私にとってはとても自然なことなんです」

── 家事の分担はどうされているのですか。

「全て私がやっているというわけではありません。一人暮らしの人同士が一緒にいるという感じで、特に決めずに適当に分担しているので、どちらの負担が重いということはないです。ただやっぱり合宿が始まると“ラッキー”という感じはありますね（笑）」

── ナショナルチームの合宿は男女一緒なんですか。

「一緒のことが多いので、合宿に入ってしまうとますます今までと変わりませんね」



▲スモールボア伏射（'94 広島アジア大会）

── それでも、お仕事をそのまま続けていらして、両立はかなりハードなのではありませんか。

「基本的には週に３日出社して仕事をし、３日は練習、１日休みというパターンでやっています。シーズン（春から秋）とオフシーズン（冬）でそのバランスは少し変わってきます。今は五輪も近いので練習日が多くなっていて、出社したときは自分のできる仕事を見つけてお手伝いするといった感じですね」

── 競技の上では、旧姓の源さんで通していらっしゃるそうですが、それはなぜですか。

「それ（源で通すこと）は大前提でしたね。戸籍の上では目良洋子なので、夫婦別姓というわけではないんです。（会社の名札も『目良洋子』となっていた）ただ、選手としての源洋子には、高校１年からずっとやって培ってきたその名前の持つイメージやインパクトがあると思うんですね。『目良』というとどうしても『自衛隊体育学校の目良』（ご主人のこと）のイメージになってしまう。だから私は、『日立情報の源』で通すことにしたんです。協会（社団法人日本ライフル射撃協会）もすんなりと認めてくれましたし。そういえば、海外遠征の時はいつもツインルームなんですが、結婚直後の遠征でいきなり夫婦同室にされたときは少しビックリしました（笑）」

終わりを決めずに長く続けたい

── 結婚後の女子選手にはどうしても“出産”が一つの壁になってしまうと思うのですが。

「こればかりは、まだ考えていないのでよくわかりません。ただ、日本ではまだいませんが、外国には出産してまた現役として戻ってくる選手がたくさんいるんです。ちょっと見なくなったなと思うと、お子さんを生んでいて、２～３年すると戻ってまたトップに立っているんです。先のことはわかりませんけれども、結婚してもできる、子供を生んでもできるとか、『こういう状況でもできるからみんな続けようよ』ともっていけたらいいなと思っています」

── アトランタ五輪が近づいてきましたが、抱負を聞かせてください。

「メダルを期待されているとは思いますが、順位は運だと思っています。競技中は自分の順位は全くわからないんです。オリンピックあたりになると、同じ点数の中に何人もいて、１点で順位がかなり変わってくるんですね。だから、うまく調整して気持ちを盛り上げて実力を100 %発揮して、自分で満足のいく時間を過ごせればいいと考えています」

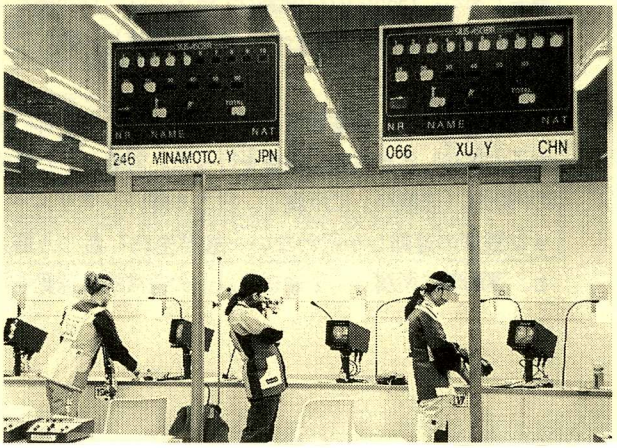
── アトランタ五輪の後は、どうされますか。

「少し休憩したいとは思いますが、自分がアトランタで終わるとは全く考えていません。次のシドニー（五輪）で終わるとも思っていません。射撃は長くできるスポーツですから、ずっと続けていきたいと思っています。自分が第一線でどこまでいけるかわかりませんが、できる限りナショナルチームにいて、海外遠征もこなしていきたいと思っています。

私は別に後輩のためにと考えているわけではなく、いつもだれもやっていない新しいことをしたいと思ってきました。それが結果的に後輩に道を開くことになるのかもしれません。それで、射撃が息の長いスポーツだということをまた私が証明できればいいなと思っています」

◇

ごく自然に結婚生活を送り、射撃の第一人者でありながらライフルが生活の全てではないと言う。端からは大変に思えることを自然体でこなしてしまう源さん。関西弁でとても明るく話をしてくださいました。「自然体でいること」はだれにとっても理想ではありますが、なかなかできないもの。とてもうらやましいと思いました。研ぎ澄まされた神経で標的をねらう射撃選手にはとても見えない、チャーミングで“たおやか”な印象すら受ける源さん、アトランタでのご健闘をお祈りしています。そしてその先、ひょっとして源さんが橋本聖子さんの五輪出場記録（６回）を塗り替える日が来るかもしれません。

（３月19日取材・聞き手／ＷＳＦジャパン・スタッフライター　山本尚子、写真撮影／高橋昭子）

▼エアライフル（'92 バルセロナ五輪）